

ただ ひろふみ
店田 廣文 さん(60)

イスラム教徒の礼拝所モスクは、悩みを持ち寄る場でもある。20年前の敷力所から、今は全国60カ所以上になった。国内に外国人10万人、日本人1万人の教徒がいる。

「9・11テロ」後、教徒たちの暮らしはどうなったのかが知りたい。学生の提案で6年前、モスクを訪れる聞き取り調査を始めた。

結束の強さが災いして、モスクは地域で孤立しがちだった。モスク同士も言語や教徒の母国の違いで、交流がほとんどなかった。モスクと地域の橋渡しをしなくては。そう感じて、モスクの代表者会議を昨年、日本で初めて開いた。

「集まってお祈りをしていたら通報された」「せんべいを持って隣人にあいさつに行ったら、その後、親

切にしてくれた」。悩みや解決例が話し合われた。連携の大切さに気づいた参加者から「自分たちが立ち上がらなければ」と声が上がった。その気づきをさらに大きくしようとして、

7日、2回目を東京の早大で開く。東京外大でアラビア語を専攻。会社員を4年でやめ、エジプトの都市の研究者に。33歳の時、エジプトの街を自分の目で見て歩き、現地の人たちと話をし、文献にはない、生きた情報に触れた。以来、フィールドワークの面白さにとりつかれた。

イスラム研究は12年、中立な分析が役目と想ってきた。でも、論文ではなく、人の生活を変えることをゴールにするのもいい。「自分の研究が初めて、世の中とつながったと感じている」

文・写真 斉藤寛子

